

平成30年度 第1回宮崎県生涯読書活動推進委員会の会議概要

1. 日時

平成31年2月19日（火曜日） 午前10時から午前11時45分まで

2. 場所

県庁4号館入札室

3. 出席者

(1) 委員18名中16名

（竹内委員、坂本委員、菅委員、黒木委員、中村委員、水谷委員、鎌田委員、山崎委員、和田委員、小原委員、赤木委員、福永委員、山下委員、宮田委員、成合委員、椎葉委員）

(2) 事務局

生涯学習（課長、生涯学習課補佐（総括）、生涯学習課長補佐（指導担当）、社会教育主事、主査）

4. 概要

(1) 課長挨拶

平成30年度宮崎県読書活動推進委員会の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

皆様方におかれましては、日頃から本県教育の推進に多大な御理解と御協力をいただいておりますことに、心から御礼を申し上げます。

本県では、平成27年度「第二次宮崎県教育振興基本計画」を改定し、施策の目標の一つとして、「社会を生き抜く基盤を育む教育の推進」を掲げ、生きる力を育む読書活動の推進を図り、子どもから大人まで読書に親しむ「日本一の読書県」を目指すことといたしました。

その推進のために「日本一の読書県を目指す総合推進事業」を立ち上げ、事業の一つとして、この宮崎県読書活動推進委員会を設置いたしました。委員の皆様方の御意見を参考にしながら、「宮崎県生涯読書活動推進計画」を策定し、漸く本年度8月に公表したところです。

本計画は読書習慣を身に付けた子どもを育成していくとともに、その習慣を大人になってももち続けることにより、生涯にわたって読書に親しみ、自分の世界や知識、仲間を広げ、知的で豊かな人生や活力あふれるみやざきづくりの実現につなげようと、生涯にわたった読書活動の推進を図るものです。

人生100年時代と言われる現代、このように生涯にわたった読書活動に関する推進計画を策定している都道府県は、今確認できている中では、本県の他、秋田県、沖縄県の二県のみです。

さて、今回は新たな委員の方々も迎え、計画策定後の初めての委員会となります。

皆様におかれましては、公私共に御多忙であるにもかかわらず、大変快くお引き受けいただきましたことを、この場をお借りしまして、改めて御礼申し上げます。

皆様には計画の進捗状況について検証していただくとともに、読書活動推進に係る施策について検討していただくこととなります。

委員の皆様方には、幅広い観点から忌憚のない御意見をいただき、今後の本県読書活動の推進にお力添えをいただきますようお願いいたしまして、挨拶とさせていただきます。

- (2) 会長・副会長の選任
 会長 竹内 元
 副会長 坂本 美代子
- (3) 事務局説明 資料1 県生涯読書活動推進計画及び概要
 資料2 平成30年度「日本一の読書県」を目指した総合推進事業の紹介
- (4) 協議要旨
 委員の自己紹介とともに、それぞれの読書への思い、事務局説明に対する感想、計画や事業のどの部分を重点的にすればいいかなどについて意見を交換した。
- (5) 発言内容

発言者	内容
委員長	自己紹介、ご自身の読書への思い、事務局の説明を踏まえ、計画や事業のどのようなところを重点的に行うといいかなど御意見をいただきたい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 認定こども園に勤務している。 ○ どのように子ども達に絵本に触れさせ、親しませるか、子ども達に平等に絵本を 読み聞かせる機会を設けるか苦心している。 ○ 幼稚園に母親による自主活動として読み聞かせの会があり、継続してきた活動の一であるが、働く母親が増え、メンバー確保がとても難しい状況になっている。現在は補助や事務の先生、バスの運転手なども入り、絵本を読み聞かせる機会を少しでも増やそうとしているところである。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大学で教えている。 ○ 今大学では入試問題の転換が大きい。 ○ 学校教育における読解と読書指導をどう分け、共有して考えるべきか。 ○ 以前読書教育は文学に偏っているとされていたが、これからは情報を読み解くというほうにシフトすると思う。 ○ (だからこそ) 逆に今で言う(文学の)読書は大事になってくると思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読書に関する全国組織の宮崎代表をしており。一時的に今活動休止しているが2か月に一度一般の方や学生など10名くらい集まる読書会を開いてきた。 ○ 読書は生きる力、折れない心、視野の広さ、生きるために必要だと思う。 ○ 読書会を開くことにより人とつながることも、生きるために必要だと実感している。 ○ この計画にあるように、子どもも大人もいつも、どこにいても本のある宮崎が実現すると、とても豊かな県になるのではないかと期待している。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新聞社で編集長をしており、社説に読書について次のような内容を書いた。 ○ 昨年大阪の書店で、全国紙に大学生が投稿した記事が拡大して掲示してあった。「なぜ読書しないといけないのか」というタイトルで驚いた。その大学生は「読書もスポーツも音楽も趣味なのだから、スポーツや音楽をやらない人がい

	<p>るように、読書もしない人がいていいと思う」と言う。読書は趣味ではない。栄養が体に必要なように、読書は人間にとって絶対必要な生きていくための糧だと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ この計画も県民が読んでわくわくするものではなくては広がらない。 ○ 全ての県立高校に学校司書を置くのは至極当然だと思う。置かない理由が分からない。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 町の教育委員会に所属している。 ○ 現在町においても読書、図書館について様々な取組を行っている。県内の一自治体として、市町村同士の連携も踏まえ読書活動推進に努めていきたい。 ○ 町では、読書を生涯学習の要として、力を入れている。 ○ 図書館の司書も生涯学習に携わる職員として多くの研修を受講している。 ○ もともと3自治体が合併した町だが、旧自治体それぞれに1館ずつ図書館がある。多くの課題があるが、この県の計画策定と同時に本町も取組を始めている。 ○ 29年度から本活事業を始めた。本と地域の方が素敵な出会いがあるよう、コーディネーターを町の職員、司書が行った。図書館の新規登録者も増えた。 ○ 今後どんどん発展をさせたいと思っている。 ○ 平成31年度には既存施設を改修し、図書館を整備して生涯学習推進を図る計画もある。読書県日本一を目指すよう町としても頑張っていきたい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肢体不自由の子どもたちが通う特別支援学校に勤務している。 ○ 先日学校図書館について、学校司書エリアコーディネーターの方にアドバイスいただいた。書架は作り付けのため改善できなかったが、本の置き方、テーブルや植物の配置など改造が始まっている。 ○ 県立図書館のやまびこ文庫も活用している。 ○ 保護者サークルに今年度から読み聞かせサークルが発足し、行事の際やスクールバスの待ち時間に週一程度活動いただいている。 ○ 個人的に Web 上の交流型読書記録サービスを利用するようになり、他の読書の感想も見ることができる。同じ本を読んだ者同士で感想を交わすのも読書の楽しみのひとつかと思う。 ○ どんなに勧めても読書に関心のなかった野球少年の息子が高校生になり野球を続けながらも、自分で本を買って読むようになった。朝の一斉読書がきっかけのように思われる。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 県内の県立高校に配置されている学校司書エリアコーディネーター6名のうちの一人である。 ○ 読書、本は、まだ見ぬ知の世界へ踏み出す「オール」だと思っている。 ○ 自分はどの学校に転校しても、図書館に常駐する司書の方がいる県で育った。学校の先生も授業の中で本を紹介してくれ、本があって当たり前、という環境だった。 ○ 読書は趣味のひとつなんだから、なければならないでいいでないかという人もいるが、先ほどの意見と同じく私も読書は趣味ではないと思っている。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読書というとすぐに文学と結びつける節がある。子どもも先生も「読書は苦手で」と言うとき、読書イコール物語・・・読めない、と考えがちだ。それは全体の一部であって、文学以外の書物を読むのも読書である。 ○ 人として生きる限り私たちは言葉を唯一の道具として使う生き物である。そこに書くという歴史、読むという歴史が始まり、人の歴史と築かれていった、となると古来から文字というのは、人と切っても切れないものだと思う。人が存在する限り本、読書は私達の身近なものである。 ○ 県では「どこにいても本がある、大人も子どもも読書をする姿がいたるところで見られ」と目指す姿を表現しているが、自分はある有名漫画家の作品タイトルをもじって、「いつもポケットには本を」というフレーズを用い、いつもそばに本がある生活を学校司書として支援するとともに、そういう立場を離れても一人の大人として県民の一人として皆と取り組んでいければいいと考えている。 ○ ゴールが生涯にわたり読書に親しむ宮崎県民であれば、この先未来の宮崎を担う子どもを大切にしたい。学校内に必ず図書館があるという日本の教育システムは素晴らしい。その学校図書館に必ず学校司書がいるようになることを願っている。 ○ 読書は情操教育に役立つだけでなく、子どもが取捨選択しながら、自立して世の中を歩いていけるよう育てることもできる。そのベースが生涯学習の一部だが、しっかり学校の教育の中に組み込まれている。大人としてもう一度自分たちが育ってきた学校時代を振り返り、いろいろな立場の皆さんと、これからの若い人達の育ちに力添えができればと思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高等学校の教諭である。現在の高校には勤務して10年、図書主任としては4年目である。 ○ 自分は読書できる環境、本はなくてはならないインフラであり、水と空気と本を同列と考えている。 ○ 読書離れになる傾向は本校も同様である。入学した頃は図書館に来ていた生徒も、次第にどうやら電子機器に夢中になっている風潮を肌で感じている。本を必要としない、というよりも、活用できない生徒の存在を実感している。 ○ これからは読み取る、読解力としての読書、リテラシーというものも大変重要になっていくだろうと実感している。読みものの読書を勧めるだけでは駄目だと感じている。 ○ 本校は勉強の好きな生徒もいるが、苦手な生徒もたくさんいる。これまで歴史が苦手な生徒には漫画を勧めていたが、最近、漫画も活字が多くて読めない、動画は無いのかと、ドラマだったら50話あっても全部見ると言われ驚いた。文字から情報を読み取ることができない、いわゆる教科書が読めない生徒が増えている。 ○ 幼い頃から家でなくとも保育所、学校などで読み聞かせ等を経験した子どもは、高校生になっても本が好きと言ってくれる一方、本に触れることのない子ども時代を過ごし、教科書の漢字や文章を読み取ることができない、リーディ

	<p>ング・スキルの身に付いていない生徒が増えている。社会の中の格差を感じ、どうするべきか苦しんでいる状況である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 県立高等学校の学校司書は雇用が8か月縛りで人が代わり、専任の学校司書がいる学校はほとんどいない状況である。自分自身も兼務であり図書主任として学校図書館の業務に専念できない。会計年度職員制度により学校司書の雇用期間が1年になることを期待している。 ○ 本来学校司書は専門職であるため、司書資格のある学校司書が小中学校、高校にいるような県になってもらいたい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校の教諭をしているとともに、宮崎県学校教育研究会の図書館教育部会の事務局に所属している。 ○ 県生涯読書活動推進計画は各学校に数冊ずつ配付されたと思うが、どれだけの人が目を通しただろうか。思いのこもった計画をいかに広げるか、どう広げるかが大事だと思っている。そのため、担当課の了承を得て図書教育部会の会報に計画の一部を紹介した。自分の立場でできる支援をしていきたいと思っている。 ○ 自分の読書のキャッチコピーは「読書は時空を超えた旅」である。今は「ホモ・デウス」という本を、ICTの世の中が進んだ後、今後自分たちを何が待ち受けているのか教えてくれる本だと聞き、恐ろしい、しんどいと思いながら読んでいる。 ○ 今年度図書主任になった。学校図書館を明るく魅力的な場所にしたい。学校図書館の専門家にアドバイスいただき、改善しているところである。中学生は絵本を（コーナー化すると）読まないとのアドバイスを受け、絵本を一般図書の棚のそれぞれの分野に置き、空いた書棚に自然科学の美しい表紙の本を並べた。生徒の反応も良く結構集まっており華やかで興味深いコーナーになったのではないかと思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 県立図書館の情報提供課長である。 ○ 図書館に異動して初めて宮崎が日本一の読書県を目指していると知った。 ○ 子どもの頃は読書していたが、歳を経るにつれ読まなくなった。 ○ 一人で読むのが読書とってきたが、人をおして本を知る、本をおして人を知るというキャッチコピーのビブリオバトルは興味深い。 ○ 認知症予防にいいと言われる「音読」や、大活字本の存在も図書館に異動して初めて知った。このように、(読書への多様なアプローチを) 新たに知ることによって読書が身近になる、今まで読まなかった人が読んでみようかな、と思うのではないだろうか。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 8年間市立図書館館長をしている。 ○ 勤務する図書館は、昨年度110周年記念を迎えた歴史ある館である。平成の合併により、合併前の自治体の図書館を含め3館体制で運営をしている。市内の他館にある本を、市民がふだん使う近場の図書館に取り寄せることのできるサービスを行っている。 ○ 市教育委員会では学校図書館支援センターとして市内の小中学校21校に

	<p>14名の学校図書館支援スタッフを配置している。市ではそのセンターを3年前、市立図書館に移管した。司書が各学校を巡回し、日報を上げ、成果や課題について月に一度、教育委員会と話し合っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ スマホなど現在子ども達が読書から遠ざからずを得ない状況にある。中・高生など、人生で多感な時期に、図書館がどのように本を手渡すことができるか、日々模索している。 ○ 県ではどこにいても本がある、というフレーズがあるが、身近なところに本があればと思う。現在積極的に、庁舎や高齢者施設などに働きかけ、100冊本を置かせてもらっており、喜ばれている。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 木城えほんの郷に所属している。えほんの郷では、感性豊かな子どもの時期にほんものに出会ってほしいと、本と自然環境を提供する活動を20年続けている。 ○ 子ども達に本を手渡す人が大事である。 ○ ふだんの活動で、読書団体、学校や図書館の関係者の方々と話しをする機会があり、子ども時代に本と幸せな出会いができる環境づくりこそが子どもが大きくなっても活字を読むことが苦にならない、大人になったとき、本を含め自分にとって必要な情報を取捨選択、読み解くことができるリテラシーを身につけることにつながるのではないか。そうすると本が無くなることはないのではないかと思う。その本を手渡す場所として、図書館、家庭での読書活動は大切だと考える。今読書が大事と言われながら、それを電子メディアが読書活動を阻んでいる。そこは大人が手立てを考えなければいけないのではと感じている。 ○ 自分は小中高と、小さな離島であっても学校に司書がいる県に住んでいた。子ども時代を振り返り、当たり前前に司書がいて、本と楽しい出会いをすることができたのが大変良かったと思う。 ○ 子ども時代が鍵ではないか。楽しい本との出会いをした人は、一時期本から離れることがあったとしても、大人になっても本と自然につきあうことができるように思う。 ○ 子どもの本との出会いを支えるのは、公立図書館、学校図書館、幼稚園等の園文庫だと思う。 ○ 県立図書館は色々な事業をしており大変素晴らしい。しかし、関わった職員が次の年度には異動し継続性がないのが残念である。他所からの異動、というのもメリットがあるかとは思いますが、やはりある程度一つの図書館で経験を積み、他の図書館に出て行くという仕組みにしなければ、読書県づくりは難しい。 ○ 図書館というものを知らない人が多すぎる。他の図書館の本も取り寄せられること、図書館に自分で調べられないこと聞いてもいいことを知らない。図書館を使えない、使おうと思わない、使う経験がない大人がほとんどである。 ○ 「どこでも」本があるのもいい。しかし本に興味のない人は、新鮮で、楽しく、わくわくする本のある場でなければ、雑多な不要本のコーナーでは手に取らない。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読書好きは放っておいても読む。本なんか、という人、読めない人達への手立てを考えるのがこの会の意義だと思っている。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 市の社会福祉協議会に所属している。 ○ 自分は福祉的などころから、図書館、本を活用している。「認知症」と本を切り口に地域支援まで引き上げ、認知症に関する本を活用した「認知症図書館」という取組を始めた。始めるときには図書館との連携に課題を感じた。県として、地域に本がいっぱいあるという状況をつくっていきたいのであれば、自分の経験を生かし、課題についてももしっかり伝えていければと思う。 ○ モデル的に3年ほど実施した認知症図書館という取組により、認知症関連の本を読んでもらう。その先に、本を読んだ人同士が本のある場をベースにつなぐべく、例えば同じようなグループを形成していたり、団体を組んだりという展開があった。活動拠点は公立図書館ではなく図書室だが、今や地域の拠り所となっている。認知症になってもそこで本を読める環境があるという事が一つ鍵では無いかと考える。 ○ 現在「認知症の人にやさしい本の処方箋プロジェクト」として薬剤師と連携し、薬局に認知症に関する本を置くことで初期相談やしかるべき支援施設につながるができるようにしている。この取組は以前県内の大学にいらした教授から、イギリスの図書館では本の処方箋という取組があり、病院の医師がこういう本を処方すると書き、患者が図書館に持って行くと、図書館はそういう本を出してくれるというお話を伺い、そこからヒントを得て、日向で実験的に実施している。認知症は見た目では分からないが、薬剤師は病院で処方された薬で分かる。薬剤師が本を媒体に処方箋を持ってきた方と関係性をつくり、支援につなげていくという初めての取組を行っている。 ○ 本を読ませるといふより、本をツールとして用いた地域づくり私達の取組のベースである。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 県PTA連合会の役員をしている。 ○ 自分は中学校まで椎葉村におり、他に何もなかったため活字に飢えており、小学校、中学校と、学校図書館にあった本のほとんどを読んだように思う。自分の経験からも小さいときに、いかに本と出会うかが本当に大切だと思う。 ○ 今、自分の子どもを見ていると、読書を阻害する誘惑が多い。家に本はあっても、本を読むより、テレビを見たり、ゲームやタブレットをいじっている時間が圧倒的に多い。 ○ 学校で「家庭読書の日」という取組を行っている。A4サイズのカードに、何を読んだか、その感想を、子どもと親が書くようになっている。子どもは途中までしか読まない本もあるが、面白いと思った本は一日5ページ、10ページと、日数をかけて読んでいます。読みたい本を読みたいときに読む、それが本来の読書ではないかと考える。 ○ 図書館や本屋に一緒に行き、子どもに本を選ばせるのがいい。 ○ 市や県のPTAの大会ではそれぞれ、優れたPTA活動として読み聞かせ団体が受賞したりしている。普段忙しい中、学校に出向いて読み聞かせをする活

	<p>動は素晴らしい。</p> <p>○ 市内のPTA副会長の集まりでは市の図書館がどうあってほしいか、という話し合いが2回ほど行われていると聞いた。図書館に関する関心も高い。</p>
委員	<p>○ 書店を経営している。</p> <p>○ 自分の住む都城市では新しい図書館ができた。従来のように静かに本を読むだけでなく、おしゃべりや、焼酎の試飲も可能な開放的で明るい図書館だ。都城市民は日本一の図書館と思っている。県内の他の図書館もこのようになり、市民の読書のきっかけづくりになるといい。</p> <p>○ 県内の主な書店が入っている宮崎県書店商業組合では2年ほど前から、本の展示会を県内で年に2回ほど行うようになり、県内の多くの学校関係者も参加している。宮崎県の「日本一の読書県」を目指した取組に呼応したのがきっかけであり、そのような書店等の活動も活発になっている。県の読書県づくりの取組の効果ではないか。</p>
委員	<p>○ 大学で学生はここ7、8年、レポートに自分の思ったことをレポートに書いてくる。そのテーマについて誰が先にどのような意見を持っているか読まないでレポートにならないと指導すると、一人の意見のみ調べてその感想をつけてくる。そこで、レポートは2人以上の見解を示し、それについて自分がどう考えるか書かないと認められないと教えることとなる。学生の読書は基本的に他者との対話ではなく情報をまとめてくる、という形で読んでくると気づいた。</p> <p>○ ある高校の探求科学コースの生徒も、新聞の論説文の要約、例えば「異文化理解とは・・・」の記事のまとめはうまいが、異文化理解の例を書かせるとつまづく。読んだことを自分の体を通して実感として読めていない、その人がどう思い、どのような手順で書いたのか、字面を読むのではなく、よく考えながら行きつ戻りつ読んでいくかということ、そうではなく、相手（書き手）を大事にせず読んでいく気がする。</p> <p>○ 子どもの貧困問題にも取り組んでいる。児童養護施設の子どもの含め学習支援をしているが、彼らが希望する職業はほとんど保育士と教員である。施設の子供達は出会う人、世界に限られるからではないか。学校図書館の改装にも関わることがあるが、学校図書館も0類から9類までの各分野のがバランス良くないように見受けられる。そうすると子どもたちは文学以外の色々な世界につながる回路が欠けることになる。</p> <p>○ 子どもが本当の読む力をつけるということ、子どもが0類から9類までバランス良く本と出会う権利を補償することが大事だと思う。一方、読解力をつけるということと、生涯楽しむための本と出会うということは難しい関係だと思う。</p>

委員長	その他言い足りなかった事、質問などあれば。
委員	○ 今現在の県の取組は読書に熱心な人、興味のある人のためのものが中心ではないか。文学作品の語りと音楽を融合した公演など、民間が行っている事業もある。このような少し読書と離れた民間の活動への支援をしてはどうか。結果的には読書とつながっていくのではないか。
委員	○ 本町では生涯読書を推進する上でボランティアを中心に進めていこうと考えている。県においてボランティアとの協働についての取組や考えも示してもらいたい。
委員	○ 以前県では読み聞かせボランティアを養成する講座があった。今は各市町村で実施することになり、実施している市町村もあるが、十分ではない。 ○ 現在のボランティアの高齢化や多忙化によるボランティアのなり手不足もあり、今また新たなボランティアを発掘する必要がある。また、読み聞かせの方法が分からず、勉強する機会を求める声を良く聞く。県や市町村がもっと勉強する機会を設けると、幼稚園、保育所、学校の関係者も参加しやすいと思う。
委員	○ 実際に県の事業に参加し楽しかったが、いまひとつ宮崎が「日本一の読書県」を目指していることが県民に浸透していない。知らしめる工夫が必要だ。公共図書館は税金払っているのだから、サービスしてもらって当たり前、と県民は思いがちだが、図書館は本来官と民で一緒になりつくりあげるものだ。宮崎を活性化するためには、官と民双方が同じ立場でものが言える関係性があるのが理想ではないか。 ○ 県生涯読書活動推進計画には4つの柱があるが、ネックは次々担当が替わり、核がないことではないか。生涯学習課や県立図書館の中に、支援センターのような核となる土台となるものを設置すれば、長いスパンで取り組むことができ、日本一の読書県につながるのではないか。
委員	○ 読書について、演劇人、薬局の方、関心があるボランティアなど、多様な人とライブラリアンがどうつながっていくかではないか。読書を推進する味方をどう増やすか。読書を推進する人、ライブラリアンを例えば、デザイナーなど専門職として応援する人が入るきっかけをどうつくるか。 ○ 長いスパンをもって取り組むための支援センターを設置すればという話があったが、大学でいえば教員養成機関として、司書教諭も含め、養成と読書活動の普及・推進のあり様を長期的なスパンで考えていきたい。
委員	○ 認知症の取組で子どもたちが関わる実践がある。学校の子ども達に認知症図書館に来てもらい、認知症についての絵本のポップをつくってもらう。それを大人がまた読んでノートに感想を書くと、子ども達がまたその感想を読む。直接会わないけれど読むことにより人をつなぐ展開であり、表現したものが他の方の生活活動に生かされているわけです。仲間づくりにはそういう方法もあるのではないか。やりながら仕込みながら次の展開を考える。お金、人は限られる。福祉の世界だと福祉だけではできなくなっている。次に誰と組むかを考え

	る必要がある。誰がするのか、それは地域で異なる。頑張っている人以外の人 がどう絡むかだと思った。
--	---